

## 「香港中文大学サマープログラム（中国語コース）派遣参加報告書」

京都大学人間・環境学学部・研究科2年 KWAK MINSEOK

本派遣者は東アジアを研究する研究者として、今回香港中文大学サマープログラムへの参加は、中国語の実力向上のみならず、東アジアに対する視野を広げて研究に活かしていくことにおいて、非常に有益であったと思う。

まず香港という地域は、小さな領土や人口にも関わらず、その特殊な政治的、文化的状況によって、東アジアを理解するために重要であると感じた。何よりも香港文化の隅々から見て取れる東西文化の融合の様相は、東アジアの諸地域が西洋文化と対面していく上で、重要な参照軸になりうると感じた。

また、受け入れ機関である香港中文大学は、香港大学と並んで香港を代表する超一流大学であり、香港の優れた教育環境を少しでも覗き見れたことは、今回の派遣のもっとも大きな収穫であったと思う。香港のビジネスビルや官庁が密集しているところに位置する香港大学とは違って、香港の中心市街地とちょっと離れて位置する香港中文大学は、香港大学よりもアカデミックな雰囲気を持っており、その点で京都大学とも似ている。香港の中心から離れているため、小さい敷地に高い建物が並ぶ香港大学と違って、広い面積にキャンパスが広がっており、自然と相まって造成されているキャンパスは、香港中文大学の学風にも影響していると感じた。

本派遣プログラムは、香港中文大学の正規生に劣らない資格を派遣学生に与えており、香港中文大学を理解するために非常に良い条件になっている。初日に交付される学生証で香港中文大学のほぼすべての施設を利用することができ、少ない数ではあるが6冊まで本も借りられる。中央図書館の役割を果たしている香港中文大学自慢の University Library は、資料の量や質もそうだが、利用の便宜性に特に感心した。初めて利用する本派遣者も何の不便もなく資料を探したり、コピーしたりすることができ、また学習空間も広くて快適であったので、香港中文大学の優れた教育環境が図書館にも表れていると思った。また香港中文大学の各々の Collage が独自の図書館を管理しており、文系である本派遣者は Chung Chi Library、New Asia Library、United Collage Libraryなどを訪問した。図書館ごとに特色のあるコレクションを具備していて、それを見るだけで研究欲が湧いてくる経験をした。特に今回は、自分の研究の一部として、中国の哲学者馮友蘭に関する資料を調べることに個人的な目的があったので、Chung Chi Library の二階にある哲学特化コーナーに行く機会が多かったが、本の配列からして模範的な学習環境が作られており、今回の派遣機関中もっとも長い時間をこの空間で過ごしたと思う。

また、プログラム参加者全員ではなく、京都大学からの派遣者に限る話であるが、香港中文大学歴史科との交流、また歴史科の教授である蕭錦華先生の講演を聞いたことも有意義な経験であった。香港は英語を公用語の一つにしていることもあって、日本よりも世界に視野が開けている感じがしたが、香港の大学生や先生方の国際感覚も一般的にいて日本より優れていると感じた。蕭先生の講演は日中関係についてのことであったが、日中関係において日韓関係がもつ重要性を力説されており、韓国人として東アジア諸国の関係を考えていくことの意義についても考えてみる良い機会であった。

最後に中国語教育について付言すると、香港は、日本が基本的に日本語一つで生活していることと異なり、広東語、英語、北京語を混用しているので、言語に対して敏感であり、言語教育も非常に強調されていると感じた。香港中文大学も、本土からきた学生に広東語を教えたり、香港人やその他の地域の学生に北京語を教えたり、また香港はアカデミックな公用語が英語なので、アカデミックな活動のための英語を教えたりする教育機関が別個に存在しており、またその教育の質も非常に高いと思う。中国本土で語学研修の経験のある本派遣者としては、香港中文大学の中国語教育は最高レベルであることは間違いないと思う。